

幼稚園教育と小学校教育の関連について (Ⅲ)

武石 仁美, 福田 啓子

(平成10年9月30日受理)

The Relationship of Kindergarten and Elementary School Education (Ⅲ)

Hitomi TAKEISHI and Keiko FUKUDA

(Received on September 30, 1998)

はじめに

幼稚園と小学校の一貫教育実践を目的とし、それらに付随する問題点のいくつかを、現行の教育体制や教育内容の検討、幼稚園や小学校の教師へのアンケート調査結果などから指摘してきた。そして、この問題は、教育制度の改革もさることながら、現実の教育に携わる教師の変容によって、解決できる部分が多いことを述べてきた^{1), 2)}。

すなわち、教師・保育者の教育観、子ども観、未来像などにより、その教育内容や指導方法も大きく変化してくるのである。特に、幼小一貫教育ということについては、現実の教育体制に対する有意性と共に、教師自身がいかなる教育観と姿勢で対応するかが重要な鍵となる。そして、これは、また、保育者養成や教員養成レベルでも真剣に取り組んでいかねばならないことを痛感したのである。

従って、本報告は、上述の趣旨のもとに、保育所、幼稚園、小学校の教員養成の立場から、どのような指導内容を、どのような指導方法で取り入れていくことが、学生の幼児・児童理解、ひいては、幼小一貫教育実現につながるのかということを検討するための資料を得ることを目的とする。今回は、そのひとつとして、幼稚園教員免許状・保育資格両取得コースと幼稚園教員・小学校教員免許状両取得コースの学生を対象に、幼児・児童観、教師観の調査を行い、幼小関連の考え方とあわせ検討する。

方 法

1. 調査対象

東京家政大学家政学部児童学科

・幼稚園教員免許状および保育資格取得コース

(以下A専攻) 1年生 81名

・小学校および幼稚園教員免許状取得コース

(以下B専攻) 1年生 72名

2. 調査期日

1997年7月

3. 調査内容

以下のテーマで、自分の考え方や感じたこと、気づいたことを自由に記述させる。

① 「現在の子どもについて」

② 「どのような、教育者・保育者になりたいか」

③ 「就学前教育(保育所・幼稚園)と小学校教育の関連について」

結 果

図1は、「現代の幼児・児童をどうとらえているか」という内容を項目別、専攻別に示したものである。

ここでは、圧倒的に多かったのが、A専攻、B専攻共a(遊べない子どもが多い)という内容であった。次いで、これらの内容と関連し、b(塾やおけいこごとが多い)となっている。例えば、「今の子どもは、放課後も校庭や外であそんでいるのはとても少ない。これは、習いごとなどで時間がないのだと思う」「最近、子どもは元気がない。子どもの仕事は遊ぶことだと思う。もっと、遊べる公園をつくって自由にのびのびと成長してほしい」「遊びの中にも学ぶことがたくさんつまっているのに、水泳教室やおけいこごとが多すぎる」「家では、テレビ、

ファミコンゲームばかりしている」などを、現代の子どもの特徴としてとらえている。特にA専攻では、強く感じている。

また、c(自分の気持ちをうまく表現できない)やd(甘やかされて、わがままな子どもが多い)は、A専攻にみられるが、g(現実的でクール)やh(思いやりや優しさが無い)は、B専攻に多くみられるのも特徴的である。具体的な内容では、「あまり遊ばないせいか、発想が豊かではなくなった気がするし、表現力に乏しいように思う」「最近の子どもは、親にいろいろなことを要求されすぎて、疲れたり、親の顔色をうかがいながら行動することが増えて、その結果自分の思うことを素直に伝えたり、何かを表現したりすることが苦手になっていると思う」「テレビや新聞をみていると、子どもたちは、私たちの時代とは変わってしまったなあという印象をもつ。少子化によって、甘えん坊になってしまい、親が甘いのでわがままになってしまっている」などがみられる。B専攻でも、同様に、「今は、小さい頃からまわりに情報がたくさんあって一般に生意気そうな子どもばかりである」「今の子どもが私は怖いです。考え方が贅沢で恐ろしいことも平気でしてしまうようだ。大人になった時どうなるのだろうか」「子ども同士の心の交流が思いっきり発散できる場所が少なくなったせいか、人や、特に老人に対する思いやりの態度があまりみられないし、お行儀の悪い子どもが増えた気がする」となっている。しかしながら、このような子どもを変化させてしまったのは、社会や家族の大人の責任であることを指摘している部分も多くみられ、「こどもから様々な要素を奪ったのは大人だと思うので、本来の場を提供できる大人になりたい」といった内容は心強いことである。

また、f(学校教育の影響が強い)においては、A専攻に多くみられたものであり、「学校教育(小学校)が要求することが多くなっていて、母親もそれに伴って子どもにいろいろ勉強させてしまうから、子どももそれが普通になってしまう」「保育園や幼稚園では、年齢に関係なく遊んだりしていたのに、小学校に入ると学年の隔たりができてしまうので、そういう関係を身につけてしまう」といったように、現在の教育制度のあり方や教育内容に批判的であった。

次に、自分が教職に就くことを前提として、どのような教育者・保育者になりたいということを示したのが、

図2である。ここでは、最も多かったのが、a(子どもの気持ちを理解できる先生)であり、続いて、b(子どもの個性を伸ばせる先生)となっている。「一人一人の子どもの考えていること、話していること、仕草を無視せず、その子どもが伝えたいと思っていることを理解できるようになりたい。そのために、気持ちをわかってあげられる力を養っていきたい」「子どもの個性を尊重し、のびのびとした教育を心から行う姿勢を大切にする先生を目指したい」などに代表される。

c(子どもの側に立って考えられる先生)では、「私は、子どものような先生になりたい。教師という一段高い所から見下ろすのではなく、自分も子どもになって子どもの視線で学び合い、遊び合いたい。教える側と教えられる側の間に一線を引かずに、子ども時代を思い返し、考えていけるような先生になりたい」などに代表される。これらの内容は、e(子どもと共感できる先生)とはほぼ内容を同じにするが、「子どもにいろいろなことを教えると同じに、子どもからもたくさんのことを教わりたい」などの、自分も成長していく教師を目指していることが、A専攻に、若干多くみられた。

j(恩師のような先生)では、「保育園に通っていた頃の先生は、私のことをとってもよく分かってくれていて、細かい所まで気を配ってくれているのがわかった」「幼稚園時代の先生が明るく、優しく、そして時には厳しく、子どものちょっとした変化にも気づいてくれるような先生だった」「小学校の時に習った先生は、紙芝居や遊びを多く取り入れて、生徒の興味をひきつける授業をしたり、一人に何か問題が起こった時は、それを皆で考え、解決へ導く、そういう先生だった」とあり、自分の目指すべき教師・保育者像は、幼い時に会った先生から影響が大きいものであることがわかる。特にB専攻では顕著であり、「子どもが大きくなって、あの時の先生のようになりたいたいと思われる先生になりたい」といったように、子どもに何らかの影響を与える教師を望む気持ちが強く現れている。

f(元気で明るく、一緒に遊べる先生)では、「いつも笑顔を絶やさず、子どもたちを元気にしてあげられる先生」「思いっきり子どもを遊ばせることができる楽しい先生」を求め、図1の「現代の子どものとらえ方」において、最も多かった「遊ばない・遊べない子ども」と結びつくものであろう。

g(平等に接する先生)、h(安心感を与える先生)、

幼稚園教育と小学校教育の関連について（Ⅲ）

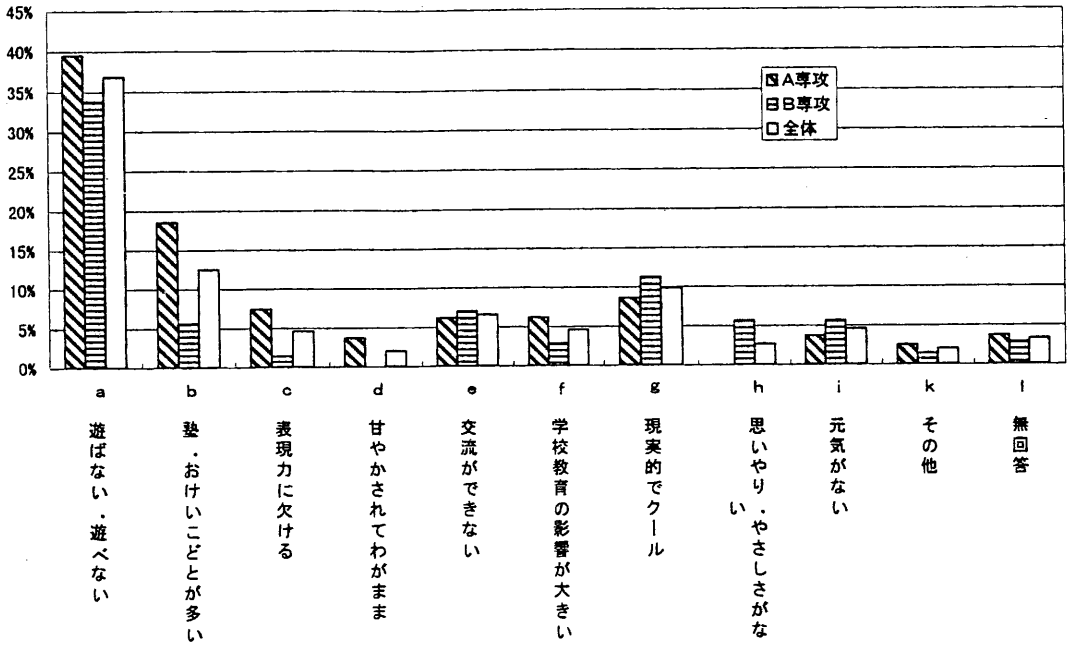


図1 子ども像について

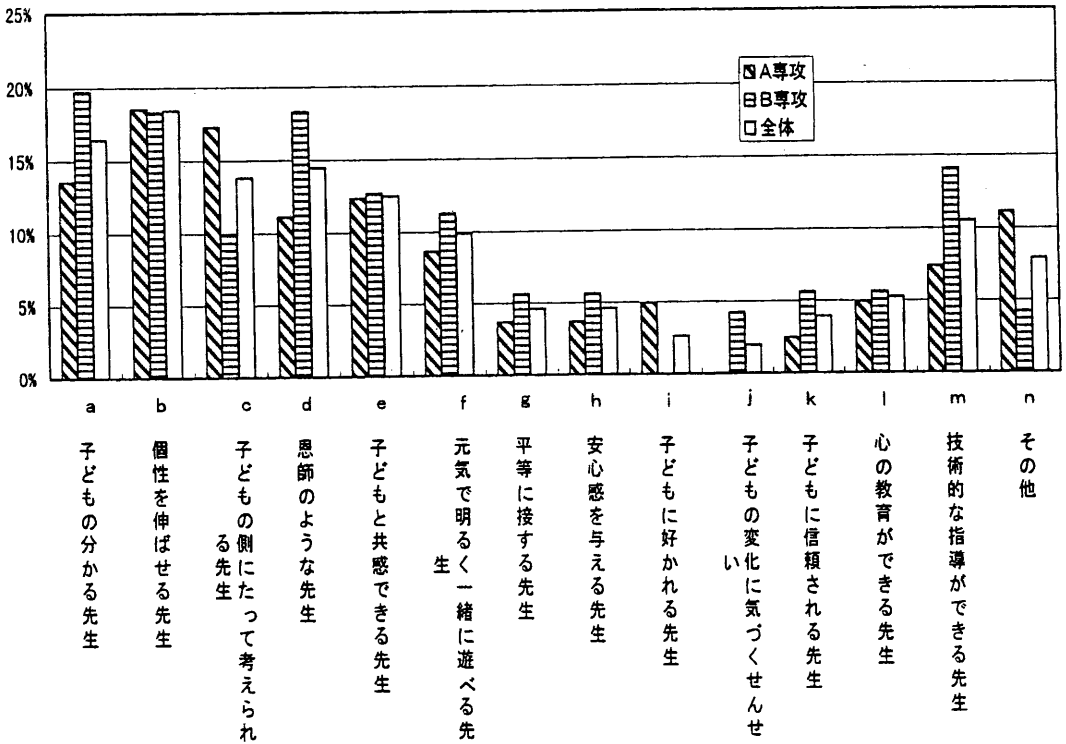


図2 教師、保育者像について

i(子どもに好かれる先生), k(子どもに信頼される先生)は、値は少ないが、iはB専攻に、jはA専攻にみられなかった内容であること、hの「子どもに対して、感情的にならず、広い心を持って接し、安心感を与えるような先生になりたい」などの内容がA専攻に多かったなど微妙な違いがみられるのは実に興味深いことである。

また、l(心の教育ができる先生)では、「思いやり」「愛情」「助け合っていくこと」「挨拶ができること」など、両専攻ともほぼ同じであるが、m(技術的な指導ができる先生)では、「自発性を引き出せる」「ほめ上手、叱り上手」「読書の大切さ」「リトミックができる」などB専攻に多くみられる。

なお、n(その他)では、一般的なことのみで具体的記述が無かったのでここでは省略したが「あまり深く考えたことがないのでよくわからないけれど、お母さんの様だと思われるような保育さんになりたい」「私の中でまだどのような先生になりたいかというのは、はっきりと決まっています。子どもについてもわからないことだらけなので、どのように接したらいいか全然わからない」などといった内容もみられた。1年生であり、実際に幼児や児童に触れる実習もまだ経験していない時期に行った調査であるため、今後、このような意識をもった学生がどのように変化していくかは、興味深いところである。

図3, 4, 5は、「幼小関連」について、同専攻の4年生を対象に行った結果を示したものである。

まず、全体としては、c(幼児教育のあり方)が最も多く、A専攻においては、半数近くの学生が指摘している。例えば、「実習した幼稚園では、算数教室のようなもの、文字指導を年長児に行っていた。驚いたのは、知能検査をしていたことです。私としては、就学前は、それほどはしなくていいと思う。小学校へ入ってからでも遅くはないのでは」「確かに早くから字が読めたり、計算ができたりすれば小学校に入って優越感が味わえるかもしれないが、それを覚えるのに費やした時間のために本来大切な人間関係ができなくなるのではないかと思う」など、大部分の学生が早期教育や英才教育に危惧の念を抱いている。そして、「小学校のための学校(準備としての)に保育園も幼稚園もなってほしくない。せめて、学校に行く前までは、子どもがやりたい、楽しい、ということ優先して、いろいろ興味をもってもらうことを目的としてほしい」という声に代表されるように、本来

の幼児教育は、遊び中心の生活であることを強調している。

次に、多かったのが、b(教育内容の違い)であり、「小学校では、教科主体になっているのに対し、幼稚園では遊びが主体ということを実際にもてきた」「小学校に入学するとすぐに、自分の机や椅子がきめられていて授業の間ずっとそこに座っていなければならないのは、子どもにとって(環境の違いが)負担になると思う。就学前はのびのびとさせたいが、自由な形態にする分、小学校とのギャップがでてしまうのが気になる」「幼稚園の見学実習を行って、こんなに遊んだのかなかと思うぐらい遊びが多かったが、小学校実習で1, 2年生の授業をみて、子どもたちの生活が全く変わり、いきなり就学するのは無理なように感じる。幼稚園で事前に身につけていかねばならないのでは」など、両教育感では、大きな差があることを、特にA専攻の多くが指摘している。

幼小関連の考え方について、幼稚園、小学校のいずれを中心にもっているかという点に関しては、d(小学校を中心とした考え方)では、両専攻ほぼ同じ割合であり、「決められた時間の中で作業し、集中する訓練も、幼稚園の年長後半時あたりからした方がいいのでは」「基本的には自由保育に賛成であり、のびのびと保育することが理想だけど、小学校に入学した時に子どもが突然一斉教育になじめるかどうか不安である」「幼稚園は、子どもの次の時期への配慮が必要」「小学校とのつながりを、幼稚園はもっと考えて、指導的な立場で接した方がいいのでは」といった考え方と同時に「幼稚園によって小学校教育への考え方が違うので統一した方がいい」「公私立の違いや独自の教育方針があり、公立の小学校とうまく連携できない」など、園差による問題を幼小関連のマイナス面としてとらえていることがうかがえる。

e(幼稚園を中心とした考え方)では、両専攻共、小学校に対して「子どもひとりひとりにあわせた教育を進めてほしい」「子どもの様子をもっと知ってほしい」など、ほぼ共通した内容である。しかし、B専攻においては、さらに具体的な「低学年教師は、幼稚園教育をもっと理解した教師が担当することが望ましい」「一年生に入学してくる子どもに対して、急に接し方が変わってしまうので子どもはとまどってしまう。小学校教育に少しづつ慣れていくような配慮が必要だ」などがみられ、その解決策として「幼稚園の先生方との交流」や「一週間ぐらい小学校の先生も幼稚園に体験入園したらいいのでは」

幼稚園教育と小学校教育の関連について（Ⅲ）

といった意見もみられた。A専攻よりも、小学校低学年教育のあり方を指摘している。

a(こどもへの関心)では、A専攻では、「幼稚園教育でも小学校教育でも子どもを思う気持ちは同じである」「子どものために」ということの意味を親も保育者もはきちがえないようにしなければならない」「小さな子どもたちには、常に惜しみない愛情をもって」といった内容など、子どもの生活を守り、成長を願う、保護者的な感情や気持ちがうかがわれる。一方、B専攻では、どちらかというと「いずれも子どもの人格を形成する大切な時期であることを忘れてはならない」「発達の特徴を踏まえながら、関連性を考えていく必要がある」などと、指導者的な立場からのとらえ方が強いようである。

f(幼小関連のあり方)については、具体的な考え方は、それほど多くはみられなかったが、A専攻の「公立幼稚園で実習し、校長先生が園長だったのでつながりがあると思った」「幼稚園の先生が年長児に、もうすぐ小学校に入るのだからということをよく言っていたので小学校が身近に感じられた」「何となく大切だということ、少しは関連があるように思った」程度にとどまっているのに対し、B専攻では、「幼稚園と小学校の両方を実習して両教育がつながったものではなくてはならないと思った」「低学年の生活科を実習して、幼稚園との関連を考えなければいけないと思った」「小学校の教師になるつもりだけれど幼稚園を体験(実習)することは必要なことだと思った」などと関心は高いようである。

また、h(特に考えていない)をみると、「小学校実習をしてないから、よくわからない」「実習を通して、特に気づいたことはない」「関連は無いように思う」などがA専攻に比較的多くみられたのは、注目せねばならないだろう。

まとめ

以上、幼稚園と小学校の関連について、学生の調査を中心に述べてきた。

現代の子どもに対してのイメージは、批判的な内容が多いが、その批判されるべき原因は、社会や学校、家庭の大人たちだととらえている。そして、本来、「子どもは、純粹でかわいい」存在であり、その子どもの成長の手助けとなるべき教師や保育者へ自分が就きたいという意欲を強く感じ取ることができる。

専攻別にみると、B専攻の学生は、小学校教師に就く

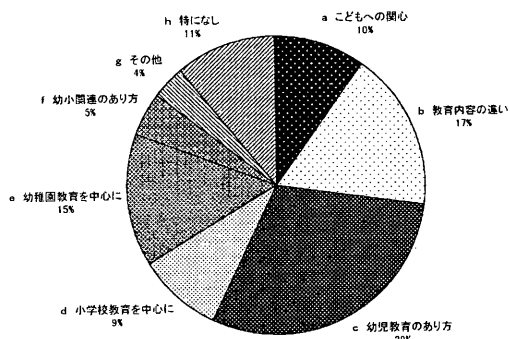


図3 幼小関連について（全体）

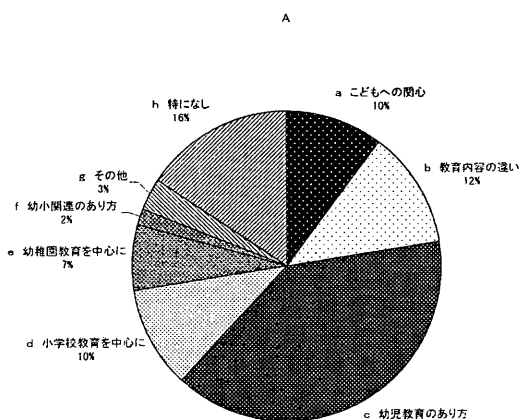


図4 幼小関連について（A専攻）

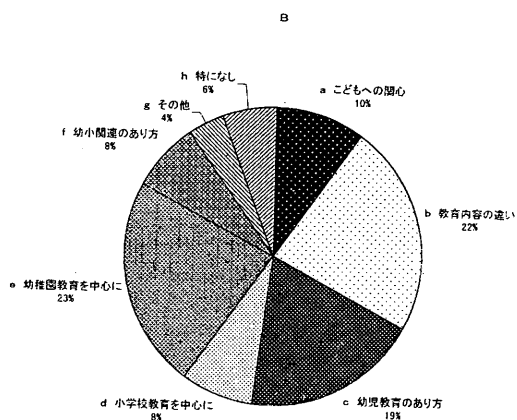


図5 幼小関連について（B専攻）

希望が強いことなどから、先に述べたように、教育的、指導者の立場からの見方やとらえ方がいたるところにみられた。一方、A専攻では、保母あるいは幼稚園教諭を希望している影響か、子どもを愛しいもの、未熟なものといった母親的感情でとらえていることが強いように思われる。

幼小関連の考え方については、A、B専攻共4年生（最終学年）に行った調査では、幼稚園、小学校の教育実習を体験し、幼児・児童の実際の行動や態度に触れたことから、内容もより具体的、現実的であった。特にB専攻では、幼稚園と小学校両方の実習を経験していることなどから、関連性についてもA専攻と比較すると、わずかながらも関心が高いことがわかる。

A、B専攻の違いは、目指すべき職種から生じる違いであろうが、どちらも現代の保育や教育の難しさを痛感しながらそれらに対してより望ましい保育者や教育者への積極的姿勢がうかがわれる。そして、そこには、それぞれの専攻の特色を生かしながら、両教育が理解できるような体制を整えていく必要性を強く感じた。

今回の調査では表面的とらえ方にとどまってしまうだろうが、これらを通して、学生が、幼稚園教育と小学校教育の理解と関連性を感じることが大切なことであり、将来、教職に就いたとき、これらの問題に積極的に取り組んでいける手がかりとなることを期待するものである。同時に、教員養成に携わる者にとって、今後の指導に新たな課題を与えてくれるものであった。

謝 辞

本研究にあたって、実習研究室および初等教育研究室の先生方に感謝申し上げます。

註

- 1) 福田啓子, 武石仁美; 「幼稚園教育と小学校教育の関連について」東京家政大学研究紀要第24集 pp. 91～99
- 2) 福田啓子, 武石仁美, 橋口英俊; 「幼稚園教育と小学校教育の関連について(Ⅱ)」東京家政大学研究紀要第25集 pp. 79～91
- 3) 福田啓子, 武石仁美, 橋口英俊; 「幼稚園教育と小学校教育の関連について その1・その2」日本保育学会第44回大会研究論文集 pp. 468～471

参考文献

- 1) 文部省小学校課, 幼稚園課編集 小学校低学年の教育を考える 初等教育資料 No.455, 1984
- 2) 文部省小学校課, 幼稚園課編集 幼小の連携 初等教育資料 No.375, 1979
- 3) 文部省小学校課, 幼稚園課編集 幼稚園教育と小学校教育 初等教育資料 No.274, 1971